

ジュリアン・グリーンの〈青春〉(三)

一九三二年七月から一九二四年十一月まで

目次

- 一 はじめに
- 二 感情生活
- 三 肉体生活
- 四 信仰生活
- 五 おわりに

(太字は今回掲載分)

井上三朗

アメリカからもどつたあとの、グリーンンの感情生活、および肉体生活を調査した。さいごに、彼の信仰生活を取り上げたい。一九二二年七月より一九二四年十一月までの、グリーンンの宗教を議論する前に、まず、これまでの彼の魂の軌跡をごく簡単にたどつておきたい。グリーンンのなかでは、神の国と地上の国という二元論的な世界観が、早くから形成されていた。母親の存命中、グリーンンは肉なるものの魅惑をうけつつも、母の愛と保護のもとに、幸福と安全と平和のなかに身を置いていた。大ざっぱにいえば、一九一四年十二月の母の死までは、彼は神の国にいた。けれども母親の永眠のあと、グリーンンは神の国にあこがれつつも、肉の誘惑にますますさらされ、地上の国への道を歩むことになる。なるほどグリーンンは、一九一六年四月、カトリシズムに回心し、クレテ神父の靈的指導のもとで、修道生活を夢見ながら生きる。しかしその修道生活の希望も、一九一九年の四月、△大いなる拒絶▽と彼が呼ぶ出来事が起こることによつて、捨て去られる。ヴァージニア大学留學時代、グリーンンはマークと出会い、不可能な愛を体験する。人間的な愛の苦悩を知つた彼は、文字どおり地上の国のただ中に立たされる。母の他界ののち、グリーンンの生の歩みは、神の国から地上の国への転落過程にほかならない。自伝『青春』が扱つている時期も、その延長上にある。このことは、端的には、すでに見たように、美と快樂をもとめての夜の彷徨、名前をもたない男との束の間の肉の交わりから明白である。

このようにグリーンンは△青春▽の時代に、遊蕩にふけつたとはいへ、信仰を完全に喪失してはいたわけではない。たとえ規則正しいものではなかつたとしても、彼は教会にかよつていたし、聖書を読むことも欠かすことはなかつた。グリーンンは地上の国にどつぷりと浸りながらも、神の国への憧憬を感じていた。彼は『青春』のなかで、次のように回顧している。

「私には神が必要だつた。△教会▽もまた必要だつた。その歌や、蠟や香の匂いのする礼拝堂が。△教会▽が甦らせる、消え去つた世界全体が。私はその世界のなかで平和にいられるのだつた。聖書の読書は、情欲のむなしさを私にわからせるのだつた」(V、一四三〇頁)。

グリーンはまず、「私には神が必要だった」と言っている。彼が神への信仰をうしなわず、神の愛をもとめていたことがうかがえる。次に彼は、「教会もまた必要だった」と述懐している。教会は rites と大文字で書かれているので、カトリック教会を指す。グリーンがカトリック教会の礼拝堂に足を運んでいたことが察知できる。彼は、「教会が甦らせる、消え去った世界全体」が必要だったとも伝えている。「消え去った世界全体」とは、神の国のことである。グリーンは地上の国に位置しながらも、神の国を待ち望んでいた。それから彼は、「聖書の読書は情欲のむなしさを私にわからせるのだった」とも思い返している。グリーンが聖書を読んでいたこと、そのことによつて、自らの遊蕩生活を悔い、否定していたことが判明する。全体として、この件からは、グリーンの神への希求が浮かび上がってくる。

グリーンが一九一九年の四月、修道生活を断念したことは、先に述べたとおりである。けれどもアメリカから帰つてまもない頃、彼はコルタンベル通りの礼拝堂のなかで、かつての夢を蘇生させている。

「この世を棄てる……私が時折心の中でつぶやくこの言葉、ほんのわずかなロマンチズムが伴っていないわけではない。この言葉のなかには、何か陶然とさせるものがあった。人は、「ジュリアンが世を棄てた」と私の噂をすることだろう。即座に私は、自分が虫けらにすぎないことを思い出して落ち着きを取り戻した。だがほんとうは、自分が虫けらであるなどとは思っていないかった」(『青春』V、一二八〇頁)。

グリーンは礼拝堂で、「この世を棄てる」ことの誘惑にかられている。「この世を棄てる」(quitter le monde) とは何か。まぎれもなく、修道士となつて、修道院に隠棲することである。グリーンは修道士となることを再び夢想して、陶然としている。この夢想のなかには、「人は、『ジュリアンが世を棄てた』と私の噂をすることだろう」と推測しているところから明らかなく、若干の虚栄心ないし誇りの気持ちが入り混じっている。だが、しばしであれ、修道生活を夢見ているという事実をつうじて、グリーンの内心の宗教的高揚、信仰のたかまりを見定めることができる。というのも、修道院に入るとは、ひたすら神を探し求めて生きることだからである。

グリーンは『青春』のなかで、一九二三年の終わりの頃、文学者が集まる夜のパーティーに列席して、「別のものへの郷愁」

nostalgie d'autre chose) (V、一四一四頁)を覚えたことを知らせている。この「別のもの」とは、文学生活ではなく、宗教的生活・修道生活を指し示す。二頁先でグリーンは、「屋根の上の牛」(Beauf sur le toit)というナイトクラブに、文学者仲間といたときのことを思い出しながら、「修道院に隠遁する」(V、一四一六頁)気持ちがよぎったと告白し、そのあと、こうしたためている。

「修道院からの呼び声が、ナイトクラブと呼ばれるものの中にいるとき以上に執拗なものになることはけつしてなかった。そのとき、この世への、自分自身への、そしてありとあらゆる肉体的情念への嫌悪が、教会の中にいるときよりもさらに私を打ちひしんでいた。私は修道士でないことの悔しさを絶望するほどまでに味わったのであるが、それは間違はなく、人が楽しむ場所においてである。だが私の悲しみを絶頂に至らせたのは、自分の生活形態のなかでいかなる変化も期待できないという確信であり、明日になれば、あたかも別のものへの郷愁が新しいアヴァンチュールにたいする刺戟物としてしか役立たないかのようになり、快樂への抑えきれない欲望が前よりも一層はげしく私を襲うだろう」という確信であった。私はこの世の君に服従していた」(V、一四一六頁)。

グリーンはさいごに、「私はこの世の君に服従していた」と断定している。彼がすでに放蕩生活を開始していたことがわかる。けれどもグリーンはナイトクラブで、「修道院からの呼び声」をしつこく聞き、「修道士でないことの悔しき」を「絶望するほどまでに味わ」つている。彼は、「この世への、自分自身への、そしてありとあらゆる肉体的情念への嫌悪」にとらえられる。この世間的なもの、肉体的なものに執着する自分に嫌気がさし、再度、「この世を棄てる」ことの衝動にかられる。この衝動はなるほど一時的なものである。「明日になれば、あたかも別のものへの郷愁が新しいアヴァンチュールにたいする刺戟物としてしか役立たないかのようになり、快樂への抑えきれない欲望が前よりも一層はげしく私を襲うだろう」と、グリーンは確信している。欲望の奴隷として快樂を漁る自己の生活様式をあらためることができないことを熟知している。しかし、たとえ瞬時のものであれ、グリーンはここで修道生活を切望している。この切望もまたほんのものである。「この世の君」すなわちサタンへの従属を脱し、修道院にひきこもることによって、神のほうに向かいたいと彼は願っている。この魂の願い、靈

の欲求を視野に入れなければ、一九二二年七月から一九二四年十一月までの時期のグリーンを正しく理解したことにはならない。

このように見てくると、この時期のグリーンの生を特徴づけるのは、二重性であるといえよう。二重性は彼の幼年時代、従軍時代、留学時代から、また後年の人生からも認められる。とはいえ、苦渋に満ちた肉体生活を送った「青春」の時代にも、同様に看取される。ここで、この時代のグリーンの、あるいは彼の生の二重性に目を向けておきたい。グリーンは『青春』のなかで、アメリカからもどつたばかりの頃の自分を、こう顧みている。

「ともかく、私は、自分がさまざま方向にひっぱられているのを知っていた。あるときは、私は霊的なあこがれをいだいていた。あるときは下劣にも、この世の、強い慰めとなるものを渴望するのだった」(V、一二八頁)。

さいごの、「この世の、強い慰めとなるもの」とは何か。「この世」が肉体の君臨する国であるのだから、肉体的な次元で慰めとなるもの、肉体的な欲求を癒やしてくれるものごとである。その前の「霊的なあこがれ」とは、あの世の神の国を待望する気持ちである。この文章では、天上的(霊的)なよろこびを念願する感情と、地上的(肉体的)なよろこびを望む気持ちとにひき裂かれて生きていたことが語られている。はじめにグリーンは、「私は、自分がさまざまな方向にひっぱられているのを知っていた」と告げている。だが実際は、「さまざまな方向」ではなく、二つの方向でしかない。魂の方向と肉体の方向とである。グリーンは霊的欲求と肉体的欲求との葛藤に悩んでいたのである。

グリーンは同じく婦仏してまもない頃を想起して、次のような思いにひたっている。

「主に招かれた客に加わることができなかった私は、この世と、ディオニソスがその象徴である偽りの神々の追跡に突き進んでいた。すでに私は聖書以外のところで、人生の意味を、あるいはもつと正確にいえば、青春の意味を探しもつていた。だがそれでもやはり私は自己分裂していた。そのことを私はよくわかっていた」(『青春』V、一二九八頁)。

グリーンは、神から離反していることを自覚し、「主に招かれた客に加わることができなかった」と自己規定している。そして「この世と、ディオニソスがその象徴である偽りの神々の追跡に突き進んでいた」と認識している。ディオニソスに

代表される「偽りの神々」とは、ギリシアの神々のことである。ギリシアの神々は周知のように、人間の肉体美を表現しており、「この世」とこの神々の「追跡に突き進む」とは、肉体の美しさの享受をとおして、地上的なよろこびを探索するということである。グリーンは聖書の世界ではなく、地上の国に生きることで、人生もしくは青春の意義を見いだそうとする。しかしながら、彼は、「それでもやはり私は自己分裂していた」とも内省している。聖書に立ち返り、神のもとに回帰したいという欲求にもとらえられていたのである。ここでも、肉体と魂との対立・葛藤がかいま見える。

『青春』において、グリーンはハグラランド・シヨームイール√にかよつていた頃、聖書の「詩篇」のなかの、「鹿が谷川の水を渴望するように、主よ、私のこころはあなたを渴望する」という一文を感動して読んだことを追憶し、「このことはほんとうだった」と確認している（V、一三二二頁）。とはいえ、このあと、「しかし私はそのことを自分自身にたいして認める勇気がなかった」というのも、私はこの世の幸福をも渴望していたからである」（V、一三二二頁）とも回想している。グリーンは天上的な幸福を切願しつつも、地上的な幸福をも熱望していた。画家を目指していた時点でも、グリーンは魂と肉体との二元性に苦しみ、靈的欲求と肉体的欲求とにひき裂かれていたのである。

グリーンはハグラランド・シヨームイール√にかよつたのをやめ、文学を志望するようになる。『青春』のなかで、彼はその時期の内面的な生を、次のように要約している。

「聖書を読むことによつて、私はよい心の動きを結実させようとした。しかしどう見ても、結果はつまらないものであった。というのも、翌日になると早速、私は目と耳から頭の中に入ってくる一切のものの餌食に再びなつて、いたからだ。私は感嘆し、望み、欲していた……さらにもう一度、二十二歳の若者は内的な人間の喉をかき切つたところだった。感覚、生、青春の奇蹟、すべてが私をひきつけ、我を忘れた。精神と同様に肉体によつても、すべてを所有し、すべてを知ることが問題だった」（V、一三二八頁）。

グリーンのなかで、地上的なものを欲する部分が優位であったことが報告されている。聖書の読書によつて、自己を改善しようとしていたのに、「翌日になると早速、私は目と耳から頭の中に入ってくる一切のものの餌食に再びなつて」とグリー

ンは指摘している。「目と耳から頭の中に入ってくる一切のもの」とは、肉体に根ざした、この世的なものである。「感覚、生、青春の奇蹟、すべてが私をひきつけ」云々という文、「すべてを所有し、すべてを知る」という語句のなかの「すべて」も、地上的なもの、ないし地上的なよろこびを指し示す。グリーンは肉体的な幸福に飢えている。彼は、「さらにもう一度、二十二歳の若者は内的な人間の喉をかき切ったところだった」と伝えている。「内的な人間」とは、聖書を読み、神の国にあこがれ、神を探求する宗教的人間のことである。グリーンはこの「内的な人間」を殺し、肉なるもののほうに向かう。けれども問題なのは、この「内的な人間」が一たんは殺されても甦るといふ点である。このことは、「さらにもう一度」(une fois de plus)という副詞句が、「かき切った」という動詞を修飾しているといふ事実から明らかである。この副詞句は、グリーンが肉なるもののほうにおもむくために、幾度も「内的な人間」の殺害を繰り返していたことを示している。グリーンのうちには宗教的な人間が棲んでいたことが重要であり、肉体的な人間と宗教的な人間とが、彼のなかで敵対していたことに注意を払うべきである。

グリーンはやがて、欲望に支配されて夜のまちを徘徊し、淫蕩にふけるようになる。彼は『青春』のなかで、そのような過去の自分を、「実際、夜、私はサタン⁽¹⁾の獲物になっていたとしても、昼は別の人間だった。そして別の人間は救われていた」(V、一三三八頁)と振り返っている。グリーンは、夜は、悪魔にあやつられて、肉体的欲望の奴隷になるとしても、昼間は、「別の人間」であつたと自認している。「別の人間は救われていた」といふ言い方から、日中は彼が神を追求していたことが看破できる。昼は神の国において、夜はサタンの宰領する世界にいたといふ認識によって、放蕩に身をゆだねるようになって、グリーン⁽²⁾の生活の二重性が変わらないことがたしかめられる。

グリーンは『青春』のなかで、自分の肉体生活を思い起こしながら、次のように語っている。

「快樂のさなかに、私は完全な生活への郷愁を味わっていた。この完全な生活は、成年まで、そして生の終わりが近づくまで、夢の状態にしかとどまらないはずのものであつた。しかし暗澹としたひとときに、少しの明りと慰めを私にもたらす、必要な夢であつた」(V、一四二頁)。

グリーンをはじめに、「快樂のさなかに、私は完全な生活への郷愁を味わっていた」と打ち明けている。「完全な生活」(vie parfaite)とは何か。それが「夢の状態」にとどまるものであるがゆえに、地上的・肉体的なものをすっかり断ち切った修道生活のことであると思われる。ここでは、完璧なかたちでの二重性が見てとれる。なぜなら欲望、言いかえれば、悪魔の誘惑に屈しながらも、神へのあこがれをいだいているからだ。また「完全な生活」への夢が、「生の終わりが近づく」まで、「暗澹としたひととき」に「少しの明りと慰め」をもたらすものとしてありつづけると考えていることから、紆余曲折を経るとしても、グリーンが神への信仰をうしなわず、保持するだろうことが想定される。

グリーンにおける二重性を観察してきた。彼が肉体的な欲望に従属しながらも、神を信じ、神をもとめていることが明瞭となった。グリーンの神への信仰は端的には、一九二四年十月に発表された『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』によって知ることができる。この作品を一見しておきたい。

『パンフレット』は合計二四九のパラグラフから成り、各パラグラフには番号が付されている。まずグリーンはこの『パンフレット』のなかで、習慣的な信仰を問題にする。第一節と第二節を引用しよう。

「一 この国のカトリック信者たちは、自分の宗教の習慣のなかに陥つてしまった。その宗教がほんものであるのか、あるいはにせものであるのか、自分たちがその宗教を信じているのか、あるいはいないのか、もはや気にかけて知ろうとしないほどまでに。そしてこの一種、機械的な信仰が死ぬまで彼らにつきまとうのだ。

二 人は自らと戦いを交えることなしに信じることはない。しかし彼らは自分たちとたたかうことをしない。カトリック、シスムを、何か単純で、自然なもののように受け入れている。もし可能ならば、彼らはさいごにはそれを殺してしまうことだろう」(一、八七九頁)。

第一節では、「習慣のなかに陥つてしまった」信仰、「機械的な信仰」が疑問視されている。グリーンによれば、信仰は、自分の信じる宗教が、「ほんものであるのか、あるいはにせものであるのか」という、自分が「その宗教を信じているのか、あるいはいないのか」という絶えざる問いかけを必要とする。真の信仰は、信じることと疑うこととのほげしい格闘の果て

にしか獲得されない。第二節で、「人は自らと戦いを交えることなしに信じることはない」と主張されているのは、そのような意味あいにおいてである。グリーンは、「カトリシズムを、何か単純で自然なもののように受け入れ」るのが、「それを殺すことにつながると考量している。宗教をたやすく受容し、それを疑わずに信じるのは、その宗教を殺すことだと推断している。全体として、グリーンは習慣に墮落してしまつた今日のカトリック信仰を批判・弾劾している。

『パンフレット』の第三九節と第四〇節を見てもことにしよう。

「三九 ミサからもどつてくる人びとは、語り、笑つている。彼らは、何も特別なものを見なかつたと思つているのだ。彼らは見る苦勞を惜しんだために、何ひとつ気づいていない。まるで何か単純で、あたりまえのものに居合わせたばかりのようだ。(…)

四〇 彼らは、ゴルゴタの丘から帰る途中で、天候の話をしている」(I、八八五頁)。

ここでは、「何か単純で、あたりまえのもの」のように、ミサに列席するカトリック信者たちが槍玉に上げられている。ミサはカトリック教会で中心をなす典礼の一つであつて、信者たちは、イエス・キリストが十字架上で犠牲になつたことに思いを致しながら、聖パンと聖なるブドウ酒を拝領する。もちろん、聖パンはキリストのからだを、聖なるブドウ酒はキリストの血をあらわす。小林珍雄氏によれば、キリストの「十字架上の犠牲」と「ミサ聖祭」とは、「実体において同一」である。それゆえ、信者たちはミサにあずかるとき、あるいは、聖パンと聖なるブドウ酒をいただくとき、キリストが人類のために、というより、自分のために死んだということを真摯に受けとめ、そのことに限りない感謝の念をもちつつ祈願しなければならぬ。だがグリーンの中には、現在のカトリック信者たちは習慣に心を麻痺させているため、ミサ聖祭のなかに、「何も特別なものを見」ていないように映る。第三九節のはじめに、「ミサからもどつてくる人びとは、語り、笑つている」と言われ、第四〇節では、「彼らはゴルゴタの丘から帰る途中で、天候の話をしている」と述べられている。「ゴルゴタの丘」とは、イエス・キリストが十字架にかけられた場所であり、キリストの生命の犠牲とミサとは、「実体において同一」であるのだから、「ゴルゴタの丘」は、ミサの言い換えである。とすれば、グリーンが目にするカトリック信者たちはミサから

の帰りに、談笑し、もしくは「天候の話をしている」点から、ミサの意味するものが何であるのか、まったく考慮しないでミサに加わっていることになる。この二つの節でも、習慣に墮してしまつた信仰が非難・断罪されている。

グリーンは第五〇節でも、ミサに列席する人びとのことを話題にしている。

「もし彼らが驚くことができれば、彼らは救われるだろう。しかし彼らは自分たちの宗教を、習慣の一つにしてしまつた。すなわち、何か卑しい、あたりまえのものに。この世を地獄に落とすのは、習慣である」(一、八八六頁)。

グリーンは、「この世を地獄に落とすのは、習慣である」と論定している。習慣的な宗教・信仰が地獄墮ちにつながる、彼は推考している。グリーンは、「もし彼らが驚くことができれば、彼らは救われるだろう」と言い放っているように、 \wedge 習慣 \vee にかわつて \wedge 驚き \vee を褒め称える。 \wedge 慣れる \vee のではなく、 \wedge 驚く \vee ことがあれば、人は救われるのである。驚きの宗教、驚きによつて成り立つ信仰が人を天国に導くと、グリーンは熟慮している。

習慣とともに、無関心は、グリーンにおいて忌むべき対象となる。『パンフレット』の第三七節は、次のような記述である。

「この世のすべての力のなかで、無関心はもつとも恐るべき力だ。天も、無関心にたいしてはどうすることもできない。無関心は愛の、どれだけ強力な策略でも、その裏をかく。それは地獄に落ちることを望み、事実、地獄に落ちることになるだろう」(一、八八五頁)。

グリーンは、「それ〔無関心〕は地獄に落ちることを望み、事実、地獄に落ちることになるだろう」と結んでいる。習慣と同じく、無関心もまた、地獄墮ちをもたらすと、彼は思考している。なぜなら無関心は、神の愛を一切受けつけないからだ。「無関心は愛の、どれだけ強力な策略でも、その裏をかく」とグリーンは言明している。無関心を前にしては、神もどんなに愛の方策を弄しても、どうすることもできない。無関心な人間は、神の愛に応えない。それゆえに、無関心はグリーンにとつて、唾棄すべきものとなる。

無関心、習慣と同様に、グリーンは生ぬるさ、生ぬるい信仰を忌み嫌っている。『パンフレット』の第八五節には、次のような一文が見いだされる。

「今日、教会は昔の異端よりもはるかに恐ろしい危険に直面している。その危険とは、不信心者にたいする寛容と、カトリック信者の生ぬるい同意とである」(一、八九二頁)。

グリーンは、教会の「不信心者にたいする寛容」と、「カトリック信者の生ぬるい同意」とを敵視している。「寛容」(tolerance)は、生ぬるさにつうじるものである。グリーンはまず、カトリック教会の、不信心者への生ぬるい態度を指弾する。では、「カトリック信者」の「同意」とは何か。信者が教会の教えに従い、カトリシスムに帰依することである。だがその従い方、帰依の仕方が「生ぬるい」(feck)として、グリーンは断罪する。とすれば、ここでは、カトリック教会の生ぬるさと、信者たちの生ぬるさの両方が、危険なものとして攻撃されている。

『パンフレット』の第九六節では、次のような文章を目にすることができよう。

「聖職者はこの世と天とのあいだに、一種、中間的な道をつつけた。彼らは穩健さをもつて天の話をする。だがその穩健さは醜悪なものではない。というのも、天はいかなる節度をも越えているからだ。天は熱烈なもののすべてであり、はげしさである。天は人間たちのはげしさに屈すると言われている。それなのに聖職者は天をこの世の好みに合わせようとしている」(一、八九三—八九四頁)。

グリーンは、「天」を「熱烈なもののすべて」であり、「はげしさ」であると理解し、「天は人間たちのはげしさに屈する」とあるように、人びとが「はげしさ」をもつて希求するならば、天国に入れるとみなしている。事実、「マタイによる福音書」のなかで、イエスは、「バプテスマのヨハネの時から今に至るまで、天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている」と告知している。信仰、天国への憧憬はもととはげしいものであるべきなのである。ところが、現代の聖職者たちは、「この世と天とのあいだに一種、中間的な道をつつけ」、天国の話をするのに、「醜悪」な「穩健さ」を用いているように、グリーンには思える。「中間的な」という形容詞や、「醜悪」な「穩健さ」という把握の仕方からは、妥協的な聖職者の微温さにたいする不満の気持ちが読みとれる。さいごの、「聖職者は天をこの世の好みに合わせようとしている」という文をおしても、世の人びとに迎合する聖職者たちの生ぬるさへの、グリーンの嫌悪感を覗くことが

できる。

グリーンは後年になつても、生ぬるさを憎んでいる。一九五二年六月十二日付の『日記』において、「私は生ぬるさよりも冒瀆のほうが好きだ」と彼は極言している。一九五六年五月三十日付の『日記』のなかでは、こう綴っている。

「もう少しで修道士になるところであつた一人の若者が、先日、▲ぼくは神さまよりも快楽のほうが好きなんですと
言つていた。この不安にさせる言葉——彼にとつて、不安にさせる言葉であるが——を、私は生ぬるさよりも好む。は
げしくて、妥協を知らぬ人びとはこのように語るのだ。生ぬるい人たちは、神のもとへ稀れにしかもどらない。これに
たいして、はげしい人びとは突然の、決定的な回帰をするのだ」。

「ぼくは神さまよりも快楽のほうが好きなんです」という言葉は、神を冒瀆する科白である。しかしグリーンはこの言葉を、
「生ぬるさよりも好む」と言い切つている。このような暴言を吐く人たちは、「はげしい人びと」である。グリーンは、この
「はげしい人びと」が「突然」、「決定的」に神のもとに「回帰」するのにたいして、「生ぬるい人たちは、神のもとへ稀れに
しかもどらない」と断じている。彼は「生ぬるい人たち」を評価せず、蔑視している。『パンフレット』の時代だけでなく、
一九五〇年代においても、グリーンは生ぬるさを憎悪していたのである。

『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』に話をもどそう。グリーンは『パンフレット』のなかで、習慣
的な信仰、生ぬるい信仰にかわつて、はげしい信仰を開示し、称揚する。彼は第二五節で、次のような見解を表明している。

「もしもこの世でカトリック信者が千人減つたとしたら、カトリシスムは存在しなくなるのであろうか。十万人減つた
としても、依然として存在するだろう。それゆえ、これは数で判断されるべきものではない。そうではなく、たとえカ
トリシスムがその構成員をただの一人しか残さなくなるまでに減つたとしても、そしてその構成員があなただであるとし
ても、それはなおあなたの中で、あなたゆえに存在しつづけるだろう」(一、八八三頁)。

宗教が「数」の問題ではないこと、「構成員」が「ただの一人」であつたとしても、カトリシスムはその人のなかで、そ
の人のために存続するだろうことが論じられている。神はこの世のただひとりの人間のためにも存在する点、イエス・キリ

ストはそのたつたひとり人間の罪を贖うために死んだのだし、死ぬのだという点が力説されている。この一節からは、神もしくはイエス・キリストをひたすら愛し、探求するグリーンンの熱烈な信仰を感知することができる。

『パンフレット』の第五五節を読むことにしよう。

「人間たちの賛辞が天に向けられるとき、それはかくも卑しく、かくまでも真理に達していないので、冒瀆のほうが好き、まじいように思われる。というのも、少なくとも、冒瀆のなかには情熱が存するからだ。冒瀆の言葉を吐く者は、天の振る舞いに驚き、憤慨し、そのことを情熱的に語る。驚きのはげしい一形態であるこの憤慨が、私は好きだ。私はこの情熱が好きだ」(Ⅰ、八八七頁)。

グリーンは、人びとの神への賛辞があまりにも「卑しく」、「真理に達していない」として、これを批判している。「私は生ぬるさよりも冒瀆のほうが好きだ」と彼が断言していることはすでに触れた。ここでも、凡庸な礼賛よりも、「冒瀆のほうが好き」とグリーンは肺肝を披いている。なぜなら、「冒瀆のなかには情熱が存するから」だ。グリーンは、信仰とは「情熱」に支えられたものであるべきだと思案している。「冒瀆の言葉を吐く者」は「天の振る舞い」に「憤慨」するが、この「憤慨」は「驚きのはげしい一形態」であって、「情熱」である。信仰のなかには、このような「驚き」と「情熱」がなければならぬと、グリーンは強調している。「驚き」にみちた情熱的な信仰がここでは賞賛されている。

『パンフレット』の第六九節では、ありうべき宣教のことが言及されている。

「ほんとうの宣教とは、気違いじみたものなのだ。だが聖職者はさかしげに、そして分別をわきまえて話している。彼らは天のことがらについて語るのが下手くそであり、わずかしか述べない」(Ⅰ、八八九頁)。

グリーンは、「ほんとうの宣教」が「さかしげに」、「分別をわきまえて」なされるのではなく、「気違いじみたもの」であると考察している。グリーンにとつて、宗教とは、真の信仰とは、狂気に属する。ここから、彼の fanatisme (狂信)、あるいは fanatique (熱狂的) な信仰が窺知できる。

グリーンは『パンフレット』の第一八二節で、ほんもののカトリシズムを定義している。

「それが氣違いじみたものであるならば、人の本性を十字架にかけるならば、情愛にとらえられた人間に衝突するならば、耐えがたいものであるならば、熱烈なものであるならば、人を地獄に落とすならば、かつまた、同じ瞬間に救うならば、いかなるカトリシズムもほんものである」(I、九〇六頁)。

この文では、「それが……ならば」(sil...) という言い方が七度も繰り返されている。この繰り返しをつうじて、グリーンンの魂のはげしい高ぶりが見てとれる。「それが氣違いじみたものであるならば」(sil est dément) とか、「熱烈なものであるならば」(sil est véhément) とかといった条件節が端的に示すごとく、彼の待望する宗教は熱狂的 (fanatique) である。この宗教は、「人の本性を十字架にかけるならば」という表現からわかるように、肉体を有する人間の本性を完全に否定するものである。また、「情愛にとらえられた人間に衝突するならば」という言い廻しから探知できるところ、両親、きょうだい、友だち、恋人あるいは配偶者、子どもといった人びとへの愛を克服し、乗り越え、ひたすら神を愛するように仕向けるものである。だからこそ、この宗教は「耐えがたい」(diff) のである。さらにそれは同時に「人を地獄に落とす」し、かつ「救う」のであるから、激烈な恐怖と歓喜が交錯するものである。このような宗教⇨カトリシズムが理想とされていることから、グリーンンの fanatisme (狂信) が認知できる。

グリーンンの fanatisme との関連で、彼が地獄への信仰を有している点に留意すべきである。『パンフレット』の第一一三節で、「十字架上の死は、地獄を廃しはしなかつた」(I、八九六頁) と彼は書き記している。グリーンンは、イエス・キリストの十字架上の死を取り上げている。言うまでもなく、キリストは人類の罪を贖うために、十字架にかけられて死んだ。周知のように、人類の始祖であるアダムはエバとともに禁断の木の実を食べたことにより、つまり罪を犯したことにより、死すべき者になった。この罪は原罪と呼ばれる。アダムの子孫である人類は原罪を背負った存在となった。人間は罪の子である。しかしイエス・キリストが地上に出現し、磔刑に処せられて死ぬことによって、人間の罪は贖われ、人間は神の子として天国に入るといふのが、キリスト教の教えである。そして神の存在を信じ、イエス・キリストの神性を信じる者は救われるといふのが、キリスト教の中心思想である。けれどもグリーンンは、イエスが十字架上で死んだとしても、地獄はなくならず、

地獄に落ちる人びとが存在すると推察している。たとえ神とイエスの神性とを信じているとしても、習慣的・情性的な信仰に安住する人、神（の愛）を熱烈にもとめない人は、地獄に行く場合もあるのだと判じている。少なくとも、信じることが救いの証しにはならないという見地に、グリーンは立っている。彼は第一三五節で、次のような意見を開陳している。

「地獄を[あなどる](#)ことは実に簡単だが、[きわめて危険なことだ](#)。地獄が存在する確率がたとえ一万分の一しかないとしても、この可能性は、私が頻繁に考慮し、毎日思いを致す値打ちがある。地獄のことを考えないのは、あまりにも大博打をうつというものだ」（I、八九九頁）。

グリーンは、「地獄が存在する確率がたとえ一万分の一しかないとしても」、地獄のことに思いをはせるべきだと言いつづけている。「地獄を[あなどる](#)ことは実に簡単だが、[きわめて危険なことだ](#)」とはじめにことわつておられるように、自らの救いのために、地獄への、もしくは地獄墮ちへの恐れのなかで生きるべきだと説くのである。

グリーン（*fanatisme*）（狂信）とのかかわりで、彼の地獄信仰にまで論及した。とはいえ、*fanatique*（熱狂的）な信仰をもち、ひたすら神（の愛）を追い求めようとしても、人間は魂とともに肉体を持つかぎり、神からの離反を余儀なくされることも起こりうる。グリーン（の肉体生活についてはすでに見た。はげしい信仰をもつ人間が罪を犯したとき、彼は地獄墮ちへのすさまじい恐怖を味わい、苦しまなければならぬ。だがグリーンは『パンフレット』の第八九節で、「天につかえること、それは苦しむことだ」（I、八九二頁）と判断している。人は神（の愛）を希求しつつも、神にそむき、苦しむ。しかしその苦しみこそが、神への奉仕を構成し、救いにつながると、グリーンは思量している。

『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』を瞥見した。『パンフレット』はグリーン（の生の、あるいは魂の歩みのなかで、どのような位置を占めるのだろうか。このことを少し考究することにしよう。先述したように、母親の死後の、グリーン（の生の軌跡は、神の国から地上の国への転落過程である。留学時代における、マークへの不可能な愛の体験、および帰仏後の放蕩生活は、彼が神から離れ、地上の国で信仰を衰弱させつつあることを端的に示す。『パンフレット』はこうした中で制作された。グリーンは、一九四〇年十二月十日付の『日記』のなかで、その頃のことを思い起こしている。

「私がこの小さな本『パンフレット』を書いたとき、信仰は私の心のなかで、鈍りつつあったと思う。そして自分の意に反して自分から逃がれていくとたしかに感じるものを、私は力ずくでひきとめようとしていたのだと思う。ここから、悲しみと怒りとあの交替が生じたのだ」。

グリーンは『パンフレット』を執筆した時点において、信仰が内心で「鈍りつつあった」ことを認めている。「自分の意に反して自分から逃がれていくとたしかに感じるもの」とは、信仰のことである。彼は信仰を「ひきとめ」るために、この作品を書いた。したがって、『パンフレット』はフランスのカトリック信者に宛てた攻撃文であるというより、自分じしんにたいして作成された文書である。ジャック・プチが『ジュリアン・グリーン』、《他所からやってきた人》のなかで規定するように、「自己告発」の書ととらえることができる。作品に表明された「悲しみと怒り」は、他者に対する感情であるというより、信仰を衰えさせつつある自分じしんにたいする反応であると解すべきである。

グリーンは一九三二年十二月二十四日付の『日記』のなかで、『パンフレット』が「子ども時代の宗教的な信仰にたいする一種の訣別」であると述べている。子ども時代、すなわち、母の生存中、グリーンは信頼に満ちた信仰を培っていた。母親は、神を信じるとともに、イエスの神性を信じさえすれば、救われるのだと息子ジュリアンに教えていた。ジュリアンは、自分が救われていると信じ、神への信頼感のなかで生きていた。しかしながら、グリーンは『パンフレット』において、地獄信仰に支えられたfanatique（熱狂的）な宗教を称揚する。この事実が、神と救いへの信頼に満ちあふれた、子ども時代の信仰との訣別を意味することは、言を俟たない。

ところで、『パンフレット』のなかのfanatique（熱狂的）な信仰は、それを告白したグリーンじしんに過度の要求を課すために、かえって彼を宗教ないしかトリシスムから引き離す結果となりかねない。この点にかんして、ジャック・プチは『ジュリアン・グリーン』と題した二冊目の研究書のなかで、「このような要求はほとんど聖性か、さもなければ、それに到達できないことの悔しきから、放棄にしか、人を導くことができない」と指摘している。「放棄」とは信仰・宗教の放棄を意味する。ジャック・プチの指摘は全面的に正しいわけではない。だが正鵠を射ている。グリーンは『パンフレット』の制作ののち、

神への信仰を完全に捨て去るわけではないけれども、カトリック教会から遠ざかっていくことになるからである。グリーンは一九二九年頃、カトリック教会と絶縁した。プチは、『パンフレット』が「自分自身への怒り」⁽¹⁵⁾の書であり、「とりわけ絶縁のはじまり」⁽¹⁶⁾を示すと論述したうえで、こうつづけている。

「この小さな本『パンフレット』」のなかには、過度の緊張、厳しき、要求が見られるので、実際、ひとつの危機を讀まないではいられない(そして回帰の前触れが読めることもほんとうであるが)。というのも、数年後、ジュリアン・グリーンをカトリシズムから引き離すのは、その規則や倫理的な掟であるというよりも、彼自身の要求であるからだ。妥協や安全な状態からなる宗教生活は、それらを絶えず否認し、あるいは再検討するので、彼には不可能であった。同じ情熱が彼を「快樂」⁽¹⁷⁾のほうにも、神のほうにも連れていくのだ⁽¹⁸⁾。

ジャック・プチは『パンフレット』の中の、「過度の緊張、厳しき、要求」に着目し、それが、長い目で見れば、一九三九年のカトリック教会への決定的な復帰の「前触れ」になったとしても、当面は宗教的な「危機」を招き、グリーンをカトリシズムから遠ざけることになったと洞察している。プチは、「妥協や安全な状態からなる宗教生活は、(…)彼には不可能であった」と言っている。グリーンは自己要求がほしいために、「妥協」や「安全な状態」を排した完璧な、峻厳な信仰生活しか容認しなかったということなのであろう。しかし人間は魂だけでなく肉体をも有するために、完璧な、峻厳な信仰生活を送ることは困難である。自己要求のほげしさが、逆にグリーンには躓きの石となり、当面はますます肉なるもののほうに向かわせることになったのである。さいごにプチが、「同じ情熱が彼を「快樂」⁽¹⁷⁾のほうにも、神のほうにも連れていくのだ」と喝破している点は注目し値する。『パンフレット』のなかに表白されたfanatique(熱狂的)な信仰は、グリーンのはげしい情熱に由来し、これによって支えられている。けれどもその情熱は、グリーンを神のほうに歩ませるとともに、「快樂」⁽¹⁷⁾、肉なるもののほうにもおもむかせるものなのである。

ジャック・マリタンは、一九六三年にプロン社から刊行された『パンフレット』の「序文」のなかで、「あまりに張りつめた感動は、放心や慣れと同じくらい人間的であつて、神に捧げられた生活からはほど遠い」⁽¹⁹⁾と解説している。マリタンは、

『パンフレット』に見られる「あまりに張りつめた感動」を問題にしている。△感動▽と訳したemotionは△興奮▽の意味もあり、このことを勘案すれば、ここでの「感動」は情熱と等価ではないにしても、情熱に源を発するものである。とすれば、マリタンははげしい情熱に支えられた信仰の危険性を確認しているとみなしうる。マリタンもまた、先に引き合いに出したジャック・プチと同様に、fanatique（熱狂的）な信仰を生じさせる情熱が、神のほうに導くと同様に、地上的・肉体的なものにも連れていく可能性のあることを見抜いている。たしかに『パンフレット』は、グリーンも認めるごとく、「はげしくて、fanatique（熱狂的）な」信仰告白の書ではある。しかしこの作品の完成ののち、彼は前述のように、ますますカトリック教会から遠ざかり、一九二九年頃、教会と絶縁した。ありとあらゆる宗教的実践を放棄した。『パンフレット』は衰えつつある信仰をひきとめるために作成された。その後の教会との関係を考えあわせるとき、『パンフレット』は、情熱が介入しているとしても、青春時代のグリーン之魂のさいごの抵抗を示す作品であると論断することができる。

五 おわりに

自伝『青春』を主な参照資料としつつ、一九二二年七月から一九二四年十一月までのグリーンの生の歩みを通観した。はじめに、『クリステイヌ』『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』を発表し、文学的出発をするまでのグリーンの外的・表面的な生活を一瞥し、そのあと彼の感情生活をしらべた。マークとの関係やカミューとの交遊、そしてロペール・ド・サン＝ジャンとの出会いを分析した。次に、グリーンの肉体生活に言及し、彼が夜の散歩に出かけるまでの経緯、行きずりの男たちとの交渉、それから同性愛のことをどのように考えているかなどを検討した。さいごにグリーン信仰生活に触れた。グリーンの神の国へのあこがれ、二重性を見たあと、『フランス・カトリック信者たちに対するパンフレット』を論じた。これらの作業によって、一九二二年七月から一九二四年十一月までの、△青春▽の時代のグリーンの生の軌跡が浮き彫りになったと思う。

では、一九二四年十一月、ロベール・ド・サン＝ジャンと邂逅したあとの、もしくは『パンフレット』を刊行したあとのグリーンの人生は、どのような軌跡をたどるのであろうか。これをたどることを今後の課題としたい。

註

- (1) 目次の三までの部分は、「ジュリアン・グリーンへの青春」(一)(二)として、山口大学「独仏文学」第二十八号・第二十九号(二〇〇六年十二月・二〇〇八年二月)に発表。
- (2) この△大いなる拒絶▽については、拙稿「ジュリアン・グリーンの思春期」(山口大学「独仏文学」第二十五号、二〇〇三)の五一―五五頁を参照。
- (3) △▽は、大文字で書かれていることを示す。
- (4) 「詩篇」四二・一。
- (5) 小林珍雄『キリスト教用語辞典』東京堂出版、一九七二、三六五頁。
- (6) 「マタイによる福音書」一一・一二。訳文は、日本聖書協会発行(一九七二)の聖書による。
- (7) 『内なる鏡』、『日記』第六卷、IV、一二三三頁。
- (8) 『美しき今日』、『日記』第七卷、V、三〇頁。
- (9) 太字は、原文がすべて大文字で書かれていることを示す。
- (10) 『暗い扉の前で』、『日記』第三卷、IV、五四七頁。
- (11) Jacques Petit : *Julien Green, « l'homme qui venait d'ailleurs »*, Desclée De Brouwer, 1969, p.47.
- (12) 『容易な歳月』、『日記』第一卷、IV、二二三頁。
- (13) この点にかんしては、拙稿「ジュリアン・グリーンの出発(二)」(山口大学「独仏文学」第二十二号、二〇〇二)の五五頁を参照。

- (14) Jacques Petit : *Julien Green*, coll. Les écrivains devant Dieu, Desclée De Brouwer, 1972, p.35.
- (15) *Ibid.*, p.41.
- (16) *Ibid.*, pp.41-42.
- (17) Jacques Maritain : «Préface» au *Pamphlet contre les catholiques de France*, Plon, 1963, p.11.
- (18) 『最後の美しい日々』、『日記』第二巻、一九三五年四月六日、IV、三六三頁。